

第6回

## グリーン麻酔科医への道

～パースで考えた環境問題～

岡原 祥子

つくばみらい遠隔レディースクリニック  
一般社団法人みどりのドクターズ 事務局メンバーFiona Stanley Hospitalでの取り組み②  
手術室内での布製

## 色とりどりの布の帽子

海外のドクターたちは、色とりどりのスクラブや帽子をかぶっているイメージがありませんか？ 私の勤務していた Fiona Stanley Hospital でも、手術室内ではみんな思い思いの布製の帽子をかぶっていました〔残念ながら(?)、スクラブは紺色だけでした〕。初めて見たときは、「うわー、本当にみんないろんな柄の帽子をかぶってる!」と感動し、自分はとうとう外国の病院に来たんだ、という実感が湧きました。

院内にはシングルユースの不織布の帽子もありましたが、自分も早くみんなに混ざりたくて、すぐに布の帽子を何枚かオンラインで買いました。あらゆる色・柄があって、小一時間迷ったのを覚えています。手術室の一員として振舞うのに、この小さな帽子は、サイズ以上の大きな役割を果たしてくれました。

## 不織布帽子のごみ削減効果

まず一つ目は、ごみの削減です。手術室が20室ある病院で布製の帽子を導入した場合、1年間で不織布の帽子10万個分のごみを減らせると言われていました。シングルユースのプラスチック製品が溢れている手術室ですから、減らせるごみは減らしたいですね。

布製の帽子で、創部感染率が上がるのではと思うかもしれませんが、考えてみれば不織布の帽子も滅菌されているわけではありません。両者の間には創部感染

率に差がないという論文や、不織布のほうが通気性が高い分、粒子汚染や受動的な微生物排出が多いと述べている声明もあり、ANZCA（アンズカ、ルビ）（オーストラリア・ニュージーランド麻酔学会）のESN（Environmental Sustainability Network）でも、使い捨ての不織布帽子ではなく、繰り返し洗って使える布製の帽子を推奨しています。

私が長く勤めた日本の大学病院でも、昔は布製の帽子がありましたが、最近は見かけなくなりました。とにかくシングルユースが清潔でよい、という風潮なのかもしれませんが、エビデンスがない以上、見直してもよいのではないかと感じます。

## 布帽子で

## コミュニケーション

そして二つ目は、コミュニケーションツールとして、です。

渡豪前、私は自分の英語にはちょっとした自信がありましたが、その自信は勤務初日のオリエンテーションで、木っ端みじんに打ち砕かれました。1対1の会話ならよいのですが、グループでの会話になった途端、周りの人たちが早口になり何を言っているのか全然わかりません。この環境で働くなんて無理だ…とあまりのショックにめまいと冷や汗で倒れそうでした。

英語の壁に加えて、病院ならではの略語も多く、例えば、セファゾリンは略して「ケフ」、内視鏡（endoscopy）は「エンドー」、血ガスは測定器（HemoCue）

の名前そのまま「ヘモキュー」と呼ばれていました。手術室での勤務中は、スタッフとテンポよく会話しないと仕事の流れが止まってしまうとしますよね。みなさんが勤務している日本の手術室に、日本語や院内の略語がよくわからず、少しとんちんかんな返答をする外国人のスタッフが来たとき想像してみてください。それが私でした。きちんと聞きとって、ちゃんと返事をしないと…! というプレッシャーから、口数がどんどん少なくなった結果、「Shokoは何を考えているかわからない」というフィードバックが複数あったようで、上司に呼び出されて「考えていることは全部口に出したほうがいいよ」とアドバイスを受けたこともありました。40歳を過ぎてこんなことを注意されるなんて本当に情けない、とかなり落ち込みました。

そんな中、布製の帽子は、苦しいながらもスタッフと会話を始めるよいきっかけをくれました。筋トレをがっつりしていたような男性麻酔科医が、アニメ風の握り寿司がたくさん描かれた帽子を愛用していたり、「日本旅行のお土産の手拭いで帽子を作ったの!」と麻酔科テクニシャン（麻酔科医のお手伝いをしてくれる専属の職種）がおしゃれな和柄の帽子を見せてくれたり、乳房再建担当の形成外科医が、いろんなおっぱいがたくさん描かれた帽子をかぶっていたり。「そのハットいいね!」と話しかけることで、その日の勤務がスムーズに始められたのです。また、スタッフから、「Shokoの

写真 たくさんの「マイ布製帽子」



ハットの柄、lovelyだねー」と話しかけてもらえたことも。その日の最初の会話でキャッチボールがうまくいくと、その後もよい流れが続く気がしました。

「名前入りの布製帽子」は患者安全にも効果が？

さらに、Fiona Stanley Hospitalの麻酔科医局では、名前と役職（例：Shoko/Anaesthetic fellow）を印刷した布の帽子を無料で配布してくれました。ただでさえ多職種が入り交じるので「はじめまして」になりやすく、しかも帽子とマスクで顔の大部分が隠れてしまう手術室で、この記名帽子は円滑なコミュニケーションに大いに役立っていました。おでこの部分に名前があると、視線を名札など下に移さなくてもよいので自然に名前を呼ぶことができます。また、緊急事態で慌ただしい中でも、名前を呼んで「〇〇さん、△△をしてください」などと冷静かつ的確な指示をすることができて、安全面にも大いに貢献していると感じました。

また、手術室内では、上下関係や職種にかかわらず、下の名前呼び合うのが普通でした。さらに、実際は本名ではなくニックネームで呼ぶので、当初は非常に戸惑いました。例えば、Andrewなら



Andy, ThomasならTomといった具合です。一度、同僚に「Hey, Thomas.」と話しかけたところ、「お母さんかと思ったよー」と笑われました。子供の頃、普段はTomと呼ばれているのに、悪いことをしたときだけ怒ったお母さんにThomas! と呼ばれたことを思い出したそうです。また、さまざまな国からの移民が多いパースでは、手術室内も実に国際色豊かで、発音がわからない名前のスタッフもたくさんいました。日本ではとりあえず「先生」と呼びかければ難を逃れられますが、ここでは名前を呼ばないと会話が始められないので死活問題です。そういうときも、帽子にはニックネームが印刷されていたので、非常に助かりました。

日本でこのような名前入り帽子を導入するとなると、やはり下の名前にはならず、姓を示すことになるでしょう。でも、「岡原/麻酔」とおでこにあるのは、なんだか圧がすごい気がします。正面ではなく帽子の側面にプリントしたらよいでしょうか。さらに「おかはら/麻酔」と平仮名表記にしたらよりマイルドになるかも。いずれにしても、はじめは違和感があるかもしれませんが、次第に慣れて

グリーン麻酔科医への道 ◆ パースで考えた環境問題～

上記のようなメリットが上回っていると思います。

髪型も多種多様、  
布製帽子も多種多様

ちなみに、パースで見かけた布製の帽子は髪型に合わせていろんな形がありました。ショートカットの人も、結んだロングヘアを帽子の中に入れていた人も、そしてドレッドやブレイズヘアをすべて収納できるとも大きな帽子も。ヒジャブのように頭の形にぴったり沿ったストレッチ素材のものもあり、職員の多様なルーツを反映していると思いました。

また、基本的に院内に髪型に関するルールはないようで、仲がよかった手術室看護師は、7色のレインボーカラー（!）に染めていました。日本の病院は、髪の色に規定があったりしますし、ルールでは大丈夫だとしてもあまり明るくすると悪目立ちしてしまうと思います。なので、私も医者になってからはずっとおとなしい髪色で過ごしてきたのですが、これはチャンス! と青に染めてみました。院内でびっくりされることはなく、「青? いいじゃん!」と褒めてもらえて嬉しかったです。

留学中に使っていたマイ布製帽子は、一緒に留学を乗り越えた大事な相棒です。見ると、良い記憶もつかった記憶もいっぱいによみがえってきます。もう使うことはないかもしれないけれど、これからも思い出としてずっと取っておくつもりです。

## 文献 12a 見出し MB 31

1. Shallwani H, Shakir HJ, Aldridge AM, et al. Mandatory change from surgical skull caps to bouffant caps among operating room personnel does not reduce surgical site infections in class I surgical cases. Neurosurgery 2018; 82: 548-54.
2. American College of Surgeons. A Statement from the Meeting of ACS, AORN, ASA, APIC, AST, and TJC Concerning Recommendations for Operating Room Attire. 2018年2月. <https://www.facs.org/about-ac/s/statements/or-attire/> (2026年4月28日閲覧)